

## 平成 28 年度 第 1 回 総合教育会議 会議録 (要約)

期 日	平成 28 年 7 月 13 日 (水) 14 時 00 分から 15 時 50 分
場 所	雲仙市役所別館 3F 防災対策室 1
出 席 者	市長部局 金澤秀三郎市長 教育委員会部局 福田保委員長、徳永 卓委員長職務代理者 山中藤久委員、平山田鶴子委員、山野義一教育長
説 明 員	教育委員会事務局 山本教育次長、坂本総務課長、下田学校教育課長、 本田生涯学習課長、前田スポーツ振興課長、 関総務課課長補佐 (記録)

### 会議日程

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議事
  - (1) 平成 28 年度に教育委員会が取り組む主要事業について
    - ① 教育環境の整備について
    - ② 学校教育の充実について
    - ③ 生涯学習の推進について
    - ④ 文化芸術の振興と歴史の継承について
    - ⑤ スポーツの振興について
  - (2) 雲仙市まち・ひと・しごと創生総合戦略について  
高等学校の魅力づくりについて
- 4 意見交換 (雲仙市の教育について)
- 5 その他

【14:00 開会】

1 開会

2 市長あいさつ

**金澤市長** 雲仙市発足から 11 年目を迎え、普通交付税の段階的縮減が始まり、また、人口減少問題など本市を取り巻く環境は厳しさを増しているが、この 10 年間の成果を礎に、今後の雲仙市が更に飛躍することが求められている。本市の最上位計画である「現総合計画」は、平成 28 年度をもって計画期間を終了することから本市「総合戦略」や「教育振興基本計画」などの各種計画を踏まえ、本市を取り巻く状況を整理し、市民の皆様のご意見をいただきながら、今後のまちづくりの目標とその実現に向けた方策を明確にする「第 2 次雲仙市総合計画」の策定に向け取り組んでいる。

教育の分野においては、昨年度「雲仙市教育振興基本計画」が策定され、それを大綱としたが、まちづくりに関する教育の考え方、人口減少社会における学校あり方など、この総合教育会議の中でも、教育委員と意見交換を重ね、教育施策の方向性を共有し、本市における教育行政の将来像を明確にした「第 2 次雲仙市総合計画」となるように努めていく。

3 議事事項

議事 (1) 平成 28 年度に教育委員会が取り組む主要事業について

※事務局から、①教育環境の整備について、②学校教育の充実について、③生涯学習の推進について、④文化芸術の振興と歴史の継承について、⑤スポーツの振興について資料により説明する。

**金澤市長** 平成 28 年度に教育委員会が取り組む主要事業について説明があったが、質問・意見はないか。

**福田委員長** 学校教育課から、本市の全国学力・学習状況調査等の結果について説明があった。それを踏まえ、雲仙市としても学力向上を目指し、更に研修を充実させるための諸取組・方向性が示された。それに関して長崎県教育会報に、小田理事長の「学力向上に向けてのささやかな思い」ということで提言が掲載されており、非常に興味深かった。本市でも参考になると思うので一部を紹介する。

全国学力・学習状況調査で、全国で常にトップクラスなのが秋田県や福井県である。どんな言葉でその県の学校教育が象徴されるかという、「笑顔の秋田、規律の福井」といわれている。具体的には、笑顔の秋田は学習への意欲、分かったという充実感であり、それはつまり学力が向上したということ。規律の福井については、各教室で整然とした学習規律が保たれている。

私たちも一昨年、福岡県志免町へ研修に行ったが、学習規律については、授業の流れが細かい部分まで学校で統一されていた。このことで、担任が不在時も他の職員が授業に入り、

同じ流れで授業が成立しているとのこと。

長崎県教育会報に戻るが、聞く力を学力の基本にするべきだということだ。聞く力は聴解力とも言う。話上手は聞き上手という言葉があるが、聞き上手は話上手でもあるし、学力の基本は聞くということではないだろうか。一般に我が国の伝統的な授業風景は、挙手をして指名をするの繰り返しが多いように思う。私たちも授業参観をさせてもらうが、挙手の多い学級は活気があるように思いがちである。それに対しても疑問を呈しておられた。

最近アクティブラーニングという言葉があるが、アクティブだけあって果たしてラーニングはあるか。聞く態度に支えられた聴解力あるいは聞く力を学習のベースにしていくべきではないかということを言われている。もう一つはパンの種が膨らんでいるかということも言われている。どういうことかということ、アクティブラーニング（ディベート【※1】やグループ学習）が最近行われているが、その中には参加したくてもなかなか参加できない、参加していても中に入っていけない児童がいる。なぜかということ、話し合いに入る前の個々の子どもたちが話す状態になっていないのではないかと。つまりレディネス【※2】が不十分だということ。話し合いに入る前に、子どもたちが話し合いができるようなパンの種を膨らませよう、丁寧に指導をしていこうということだ。グループ学習で全員発言するのは難しいので、一部の子どもが中心になってもっぱら聞き役という子がいる。全員発言をさせるためには、どの子も意見を言わずにはいれないような事前の指導、準備が必要ではないだろうか。

最後に書くことをもっと取り入れようということだ。最近、文字はキーボードで打つものだという風潮が学校教育にはないだろうか。いささか逆行するような考え方だが、学校は抵抗を試みてほしい。つまり、ICT教育に頼るのではなく、書くことによって得ることが多い。

小田理事長の提言や福岡での視察を受けて思ったことは、学校でやると決めたことは徹底的にやるべきで、そこは管理職のリーダーシップである。勉強を楽しくやるということも大事だが、鍛えることをためらってはいけない。厳しく取り組む必要がある。雲仙市内でも〇〇方式といった感じで強化に取り組んでいる学校もあるが、従来研究指定を受けて得られた結果だと思う。研修会でそういったお互いの良さを出して、例えば雲仙市の学力を向上していくためには、どうすればいいかというような研修を深めてほしいと思う。

【※1】ディベート：一定のテーマについて、賛否二つのグループに分かれて行われる討論のこと

【※2】レディネス：学習等に必要な準備状態のこと

**下田学校教育課長** その文章を拝見したが、学習規律とそのための学習パターンをしっかりとは密接させることは大切だと思う。本市も今年学力調査を実施するが、小学校1・2年生は除外した。低学年の時にしっかり鉛筆で書いたり、ノートの使い方であるとかそういう基本的な姿勢を身につける段階が小学校1・2年生。全ての教員が同じ方向を向いてやらないと学力は向上しないと考える。

今年度の学力向上対策研修会は、小学校5・6年生担任以外、中学校では国語、数学、英語以外の教員も集めて実施をしている。他の教科の問題を見たこともなかった教員がそれを見て、自分の教科に活かせると思う。ご意見を参考にしながら今後もやっていきたい。

**徳永委員長職務代理者** 学力調査について、全職員が当事者意識を持っているということと言われたが、今までは小学校 5・6 年生、中学校は調査教科担当の教員が中心となって取り組んでいた傾向があったが、今年度からは全学年が実施するので、更に当事者意識が高まるのではないかと。

教員の研修の充実とあったが、年間 26 回されるという話だった。福岡県志免町の話が出たが、よい指導をされる先生の授業を見せてもらうのが一番いいという話もあったし、私の経験からもそう考える。

目的を明確にした研修会にすることで、課題が明確になると思うが、良い取り組みをされている先生の紹介や、授業の実施等は考えているのか。

**下田学校教育課長** 26 回の研修会は市教育委員会主催の研修会で、その中で学力向上に関わる研修は約半数くらい。その他は、学校訪問指導が中心となってくる。年間 7 校程度を訪問しているが、教科等指導員として委嘱した教員により、授業をされた先生方に学力向上に対する指導を行ってもらっている。また、毎年 3 校を研究指定しているので、市内の先生方に授業の風景をしっかりと見てもらう。研究授業への参加が今まで管理職が多かったので、直接授業を担当している先生方の参加をお願いしていく。

**山中委員** 国語の成績が伸びているというのは、生涯学習課が小さい時からの読書を推進していることの成果が出ていると思うが。

**下田学校教育課長** 国語の成績が向上したというのは、昨年から長崎県全体で課題とされていた言語活動や、書くことについて特化した指導を、各学校が朝の時間を使って実施していたので、それが平成 27・28 年の 2 年間にかけて効果が出てきたのではないかと。

また、スクールサポーターを配置して、各小学校での子どもの 1 年間の図書貸出冊数が 150 冊を超えるくらいになっており、貸出冊数と子どもの学力の相関関係はまだ検証していないが、いろんな物語を読むとかいろんな記事に触れるということがその子の経験になっていくと考える。

**山中委員** 子どものなかで本を読む子、読まない子がいるが、小さい頃から読む習慣をつかさせるのは大事と思う。生涯学習課とタイアップして読書を推し進めていくのが学力の向上に繋がると思う。

**金澤市長** 学力調査はいつから始まり、どのような経過をたどり、教育委員会から見てどういふところに問題点があると思うか。

**下田学校教育課長** 全国学力・学習状況調査は始まって 10 年になるが、当初文科省から実施の通知があり、参加主体は市町村で、最初は全ての市町村が参加しなかったが、現在は全国の市町村の学校が参加している。

全国的に、基礎・基本を問う問題とそれを活用する問題の 2 つの問題があり、基礎的な問

題は概ね平均点までいくが、活用問題に課題がある。本市の子どもたちも同じ課題である。誤答を記入する子どもはまだいいが、無答の状態で提出することが一番の課題。新潟県、福井県、秋田県の子どもたちは活用問題で高い数値をあげている。

**金澤市長** 学校の先生方が学力調査の点数・評点に絶対的な信頼を置いてないイメージがあるが。

**下田学校教育課長** 実際、これまでもそういう声はあった。毎日の授業のなかで指導している内容と、出題される問題の質との間にギャップがある。先生が国が実施するテストだからという考えを持っている。どの問題も学習指導要領に記載があり、しっかりと身につけさせなければならないので、そこができていないというのは、子どもたちの力が不十分ではないかということが言える。そこに先生方の目が向かない学校があるのも現実である。

**山野教育長** 生きる力を育むのは机上だけではない。学校としては生きる力を育むための教育をしているのに、そこだけスポットを当てて学校の評価をする。塾ではないのでそれは違うのではないかというのが教員にはあると思う。

**金澤市長** 学力調査の結果について、教育長は最高点、平均点等、全部分かっているのか。

**山野教育長** 全部分かっている。学校も個人の成績は全部分かっている。しかしそれを公表すると、様々な問題が発生することが想定されるので公開していない。国が実施するので、国が責任持って対処しないといけないが、首長の考えで公開しなければならないことになったりする。学校も個人ごとのデータは持っており、個人指導は行っている。

**金澤市長** 雲仙市の特徴はあるか。点数の分布図で山型がなだらかであるとか M 字型になっているとか特徴は分かるか。

**下田学校教育課長** 雲仙市の特徴は山が下の方にきている。これは小学校 6 年生、中学校 2 年生の指定した学年である。雲仙市の小学校は特に小規模校が多い。例えば 6 年生が 1 人しかいなかったら、その子どもの点数がそのまま反映されてしまうので、公表するときには配慮を要する。学校別に関しては一切公表していない。広報誌には雲仙市の全体の傾向として、平均正答率よりやや低かったという表現をしている。

**山野教育長** 学校間の格差がすごくある。小学校は 20 校あるが、二極化している。県の平均を 10~15 ポイント下回っている学校や、県の平均を 5~10 ポイント上回っている学校があり、この差はすごく大きい。

**金澤市長** アウトリーチ事業というのは。

**本田生涯学習課長** 文化芸術分野においてのアウトリーチという用語は、公共の文化ホールから演奏する方を、施設外部に派遣して身近に感じていただくという意味。

自主文化事業団の事業の一つとしてこういった取組が実施されており、なかなか来れない障害者施設等に募集をかけている。

**金澤市長** 埋蔵文化財について、愛野地区の民間開発事業に伴う発掘調査の実施とあるが、具体的にどこを指すのか。

**本田生涯学習課長** 全般を指しており、個人の方が住宅を建てて浄化槽を設置するとか、民間の商業の方が店を建てることを指している。具体的にはあるかどうかは別の話で、出てくる可能性があるということである。

議事 (2) 雲仙市まち・ひと・しごと創生総合戦略について

(高等学校の魅力づくりについて)

※事務局から、雲仙市まち・ひと・しごと創生総合戦略について（高等学校の魅力づくりについて）資料により説明する。

**福田委員長** 国見高校の場合、県外や県内の遠距離から来ていると思うが、下宿生、寮生はどのくらいか。

**坂本総務課長** 下宿は14名である。第一烏兎寮には県外・市内含めて約30名、第二烏兎寮には10名程寮生がいる。3年生から優先的に入寮できるようだが、抽選に漏れた生徒は民間の下宿に入るようになっている。寮の費用は34,000～35,000円、下宿生は約65,000円を支払っており、そこに大きな格差が生まれている。

**福田委員長** 今の説明で趣旨は分かったが、中学校での進路指導のあり方に関わってくる。資料に記載があるとおり、本人と保護者の希望等を聞いて進路を決定していると思うが、雲仙市には工業高校や農業高校、商業高校などが無いので、その方面を希望する生徒は他市に流れていく。また、中学校の段階でも他市へかなり流れていると思う。雲仙市は長崎市や県央地域に近く、案外交通も便利で通学の範囲が広がってくるのではないだろうか。個々人の希望があるのに、地元和学校にどうにかしてやりたいというのは中学校の立場から見ると苦しいと思う。計画の趣旨は分かるし、高校がなくなってしまうのではという危機感があるのも事実だと思う。

**金澤市長** きっかけがPTA会長経験者から、国見高校や小浜高校の存続が将来的に危うくなる状況と鹿児島県志布志市で自治体が県立高校の支援策に踏み込んだことがあり、庁内で議論を始める時、教育委員会でしたほうがいいか、またそれ以外でしたらいいか整理した結果、教育委員会に高校と複数回協議を重ねてもらい、案としてこのように出してもらっている。

一番ネックになるのが、提案するのであれば資料に記載があるようなことを整理しないと非常に難しい状況である。我々も最終決定に至っていない。

**山中委員** ここ数年、諫早東高校が定員割れになっていないので聞いてみると、看護系の専門学校に行けるコースに人が集まってきている。このように特化したことを始めると定員割れにならなくなったという話を聞いた。高校を存続させるためにこういう政策をするのは分かるが、国見高校ならサッカー、小浜高校なら観光といった強みを打ち出して人が来るかというのは疑問である。高校自体に人を集めるための魅力を作ってもらわないと、雲仙市から補助を出しても人が集まるのは難しいと思う。

**坂本総務課長** 現在市内の高校に通学している生徒が約 80 名程度おり、このままいって存続が危うくなれば、その生徒たちも市外に出て行く。市としても何らかの支援をして、支援策を多方面に発信すれば、市外の私立を希望していた生徒が地元の高校に行くのではないかという思いがある。もちろん支援はずっと続くわけではないので、高校が魅力を積み上げていかなければならない。

**福田委員長** 両校とも生き残りをかけて、自分の学校の魅力をもっと発信すべきではないか。国見高校はサッカーが非常に有名だが、最近の成績はあまり上位までいっていないようだ。小浜高校の場合はビジネス観光科があり、卒業生を知っているが、他種へ就職している。学校が魅力をもっとアピールし前面に出して欲しい。

**山野教育長** 県立学校であるがゆえに高校ができることと、できないことがある。学校でできないことを我々が危機感を持って支援することで、先生方の士気、意欲も高まるのではないか。相乗効果で両校を盛り上げていきたいという思いがある。

**徳永委員長職務代理者** 国見高校はスポーツコース、看護コースがあるが、カリキュラム的に上の方に繋がっていくかははっきりしないが、そういう取組をしているようだ。日大高校など私立に行く生徒には、上の学校に進学したいという生徒もいるので、国見高校がそこからいかに伸ばしていけるかというのがネックになると思う。

**金澤市長** 引き続き検討させていただく。

#### 4 意見交換（雲仙市の教育について）

※視察を行った喜多方市小学校農業科の取組みについて、山野教育長より説明後、意見交換がなされた。

5 その他

次回の開催時期について、平成 28 年 11 月に開催することを確認する。

【15:50 開会】